



育そのものをやっつけていらっしやる
まちだなと思っています。

**充実した施設で
充実した生涯学習を**

川井：平成四年に、第四回全日本生涯学習フェスティバルが宮城県で行われましたが、そのメイン会場が白石だったんです。以降、生涯学習を中心としたまちづくりを一つのテーマにしております。

ですから、お城も、碧水園も、キューブも、スパシヨランドも市民が一学習一スポーツをやるために必要な施設ですが、その学習をより高めていくためには、どうしてもそれぞれの施設が本物でなければならぬと考えています。

中村：確かにその通りですね。これは全然別な話ですけど、鹿児島で新しい立派な県庁ができました。ある人に聞きましたら、ここまで職員の服装が変わるとは思わなかったと言っています。

結局、施設が充実して、しかもその程度が高いと、こちらもきちっとしたものになるんですね。ですから、音楽を聴かれる方の中で、一番マナーがいいのはおそらくキューブではないですか。

**彫刻制作は
環境づくりから**

川井：音楽の話ですが、先生はフオーレとかモーツァルトのレクイエムを耳にしながら彫刻をつくっ

**文化とは
楽しむもの**

川井：最近感じるんですが、何か日本語の「文化」という言葉が非常にわかりにくい。文化という言葉の中で、学問、芸術としての文化と生活様式の文化がごっちゃに使われている感じがします。

中村：文化の解釈の仕方はいろいろあるかもしれませんが、文化と

ておられるとお聞きしました。ミゼレーレ(注1)などはそのようにしておつくりになったのかなという感じがするんですが、やはり音楽、彫刻いずれも芸術としての共通点があるということでしょうが、それとも先生が音楽も好きだからなのでしょうか。

中村：私も目は通して仕事をやるものなんです。でも人間感覚というのは、目からだけでなく、耳からのサブがあれば、さらに感覚が高まるものです。他の場合には、例えばお味の方も入ってこなければならぬとか、いろいろなことが入ってきます。それが全部合わさってイメージの世界ができてるんだらうと思うんです。

やはり一つのものをつくり出すときに、目で見、考え、そして耳から入ってくる、そういう雰囲気の中で、これは環境なんですよ。か、その中に身を置いてみて初めてできることだらうと思います。

この言葉で例えれば「楽しむ」という言葉に置き換えてみましょうか。芸術を楽しむのは芸術文化、生活を楽しむのは生活文化、映像を楽しむのは映像文化というふうな。何でもそうでしょうけれど、今の時代は文化というのを楽しむと解釈するような考え方になりつつあるのかなと。

例えばお酒をいただくとき、おちよこはこれではなくてこっちで飲むとおいしいよとか言いますね。市長さんも随分凝っていらっしやると思いますが、生で楽しんでいらっしやるのは市長さんご自身なんです、本言うとね。

絵でも彫刻でも、この空間だから一点置けばいいとよく言っじゃ



(注1) 中村氏の代表連作
ミゼレーレⅫ(左)ミゼレーレⅦ(右)

ないですか。でも生活を楽しむのが文化であるならば、楽しむと置き換えると、絵を楽しむならいっぱい絵があってもいいじゃないですか。しかし今の日本の場合は装飾として考えている。この空間の中でこれ一点があればもう格好がつくと。そういう意味からいくと、本当は楽しむのではなくて飾りということなんです。

例えばキューブなどいい建物ができます。いいものを建てたらもうそれでひと安心、白石には素晴らしいものがあるよではいかがなものでしょうか。その中でスポーツし、素晴らしい音楽を楽しんで初めて「文化する」ということになるのでしょね。そんなふうには私は文化というのを「楽しむ」



A Conversation to Start the New Year
**川井市長の
新春対談**

- 略歴
- 1926年 三重県に生まれる
 - 66-67年、69-70年 フランス留学 (アベル・フェノサに師事)
 - 72年 鹿児島大学教授
 - 84年 第16回日展出品作「焦燥の旅路」で文部大臣賞受賞
 - 88年 第19回日展出品作「朝の祈り」で日本芸術院賞受賞
 - 89年 日本芸術院会員に任命
 - 90年 (社)日展常務理事就任
 - 92年 鹿児島大学名誉教授
 - 94年 (社)日本彫刻会理事長就任
 - 96年 パリで「中村晋也展」を開催
 - 97年 (財)中村晋也美術館を設立
 - 99年 勲三等旭日中綬賞を授与

彫刻家 (日本芸術院 鹿児島大学名誉教授)

Nakamura Sinya
中村晋也さん

ホワイトキューブ・コンサートホールホワイエ空間には、私たちの心を和ませてくれるブロンズ像が5体あります。また、二の丸公園には、郷土の横綱「大砲万右衛門像」が置かれ、白石城の観光スポットのひとつとなっています。

21世紀の初頭を飾る新春対談は、これらの制作者で日本彫刻界を代表する中村晋也さんに、半世紀にわたる創作活動を踏まえて、大砲像制作にかかわっての感想、芸術とは何かなどについてお話をいただきました。

作家の言葉が表れているのが芸術、楽しむことが文化

川井：日展の審査主任として発表を終えられたばかりで大変お疲れのところ、今日は対談に快く応じていただきまして、誠にありがとうございます。

先生とは、どういう彫刻をキューブに置いたらよいかということからご縁ができてまして、いろいろとお世話になっております。今日はよろしくお願いたします。

中村：よろしくお願いたします。

**白石は歴史のまち
本物指向のまち**

川井：まず最初に、何遍かキューブのブロンズ像の据えつけとか、大砲万右衛門の銅像制作ということと白石においてになっておられますが、白石とはどういうまちだと先生はお考えですか。

中村：やはりお城があって、そして片倉小十郎の菩提寺がある。一つは、いわゆる歴史のまち。それから歴史でなくて人為的なことを考えますと、最先端のキューブのような建物がある。かといって今度また非常に伝統的な建物、つまり能楽堂がございましたね。これらは後世に残るものですが、それをとってしましても歴史のまちであると同時に本物の建物、それから本物指向、そんな気がしてならないんです。

ですから、本物のところから本当に次の市民教育あるいは人間教